



Step Forward >>>

ステップフォワード

国際派女優の武器は、英語と 自由な心、そして不屈の精神

常に「攻め」の姿勢で新たな世界を切り開く
女優

工藤夕貴

工藤夕貴 (くどう・ゆうき)

東京都出身。渋谷でスカウトされたのをきっかけに12歳で芸能界デビュー。1984年映画『逆噴射家族』に出演。14歳の頃から海外での女優業に興味を持ち、'89年ジム・ジャームッシュ監督の『ミステリー・トレイン』でハリウッド進出を果たす。'99年にヒロイン・ハツエを演じた『ヒマラヤ杉に降る雪』で世界的にその名を知られるようになる。その後も『ピクチャーブライド』『SAYURI』『ラッシュアワー3』『リミッツ・オブ・コントロール』など、意欲的に海外作品への出演を続ける。2012年に主演した日本・カナダ共同製作映画『カラカラ』はモントリオール世界映画祭で「世界に開かれた視点賞」「カナダ映画を対象にした観客賞」をダブル受賞。'05年には、静岡県富士宮市に自然農の農園を持ち、「カフェナチュレ」をオープンさせた。'90年、『戦争と青春』でブルーリボン賞主演女優賞受賞。著書に『工藤夕貴のアイウエオ式発音革命』（アスコム）。近作には、NHK BSプレミアム 渾かなえ原作ドラマ『山女日記』主演：立花柚月役がある。



>> 自力で身につけたネイティブ並みの英語

「おすすめはどれですか?」「これは私のです」——外国人に基礎的な日本語を教えるNHK Worldの番組「Japan-easy II」が好評だ。日本だけでなく世界中の視聴者が見ているこの番組には、英語の解説ナレーションが入る。その発音の良さから、当然ネイティブスピーカーが話していると誰もが思うはず。だが、スタジオにはマイクに向かう女優・工藤夕貴の姿がある。

「英語をメインに話す人たちだけが見る番組ではないので、誰が聴いてもわかりやすいように、滑舌が良くてストレートな発音を目指しています。筋肉のように、英語も使わないとだんだんなまってしまうものなので、こうして使える機会をいただけてうれしいですね。毎回、放送後に自分でも聴いてみて、うまく舌がまわっていないところなどを確認し、復習しています」

両親が日本人で留学経験もない少女が、ハリウッドを目指して自力で英語を身につけ、夢をかなえた。そして今も変わらずやりたいことに向かって果敢に挑戦している。そんな自身の生き方を、工藤は「攻めの人生」と語る。

>> 14歳でハリウッドを目指すことを決意

有名歌手を父に持つ工藤だが、芸能界入りしたのは街でスカウトされたことがきっかけだった。いったんは歌手を目指し、初出演した映画『台風クラブ』（1985年）のオーディションにも「あまり受かりたくなくて落ちるつもり」で行ったが合格。思春期の複雑な心境を演じきった役が評判を呼び、女優への道が開けた。とはいえ、基本的にただ仕事に来るのを待つという時間も多くある中、ハリウッドではどんな作品でもキャストはオーディションで決まると聞いた工藤は、「英語を勉強して海外を目指そう!」と思い立つ。14歳のことだった。

全て自己流の英語学習だった。FEN※を聴き、CNNを見て、マンガ『Peanuts』を読んだ。番組で外国人タレントと一緒にになると、「英語をしゃべりたいので、英語を話してください」と

お願いした。やがて、工藤の演技を目にしたことから彼女のイメージで脚本を書いたというジム・ジャームッシュ監督の『ミステリー・トレイン』のオーディションの話がきた。電話でのロングインタビューを経て見事役を獲得し、初めてハリウッドへ飛んだ。工藤の英語力はすでに、用意された通訳が不要になるほどのレベルになっていた。

「通訳の方が来てくださったんですが、英語は14歳から独学ではありますが一生懸命勉強していたので、現場で全て自分でなんとかできてしまった、という感じでした。気づけば自分が伝えたいことを相手に伝えられるくらいにはなっていました」

※Far East Network (極東放送網)。現在のAFN。

>> 3カ月発音を特訓した『ヒマラヤ杉に降る雪』

大きな転機となったのが、1999年に公開された『ヒマラヤ杉に降る雪』だった。ヒロイン・ハツエ役に選ばれた工藤は、すぐにホテルに缶詰めになり、専門のコーチの下で3カ月間発音を特訓した。すでにネイティブ並みのアメリカ英語を習得していた工藤だったが、ハツエは1940年代の日系アメリカ人としてイギリス寄りの硬い英語を話す設定だった。タイプの違う英語を学ぶ中で、自らの発音の弱点も見えてきた。

「bとv、lとr、thとsなどの発音の違いや、単語の語尾と語頭がつながるリエゾンのような発音が、セリフとして速く話そうとすると飛んでしまったりするんです。でもそういうニュアンスが意外に重要だったりする。語尾のsを言いそこなうと単数なのか複数なのかわからないわけですし。日本人にとっては大事ではないニュアンス、日本語にはない口の動きが難しく感じました」

日本との違いは言葉だけではなく、仕事のやり方にもあった。全ての仕事が細分化されているハリウッドでは、誰もが自分の専門分野に集中していて、皆のことを考えながら全体として行動するという意識はなかった。自分のスタンスをまず考え、相手とネゴシエーションしながら自分の意見や要望を通すメンタリティーも身につけた。

アメリカで生活することを決意した工藤は、貯金をつかいながらオーディションを受け、少しずつ自分の世界を広げていった。家を購入し、自分でリノベーションをした後に売却して利益を得たり、日本語教師として大勢の生徒を抱えたり、犬の調教師、ベビーシッター、タトゥーショップの下絵師など、できることは何でもやった。

「昔、漫画家になりたくて絵を描いていたので、それを持って行って売り込んだりもしました。私はおとなしく見えるので、その頃ハリウッドの映画界で流行り始めていた“気が強く^はラフなアジア人”の役とは雰囲気合わないところがありました。でも周りにそういう人がいないので、どう演じたらいいのかわからない。だから、さまざまなアルバイトをやることで、いろいろな人の態度や文化を学べると思ったんです」